The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Wilfred Owenの「笑い」の類語とメタファー TheLast Laughは誰の笑いか
Author(s)	渡辺, 秀樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2017, 2016, p. 9-17
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/62017
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Wilfred Owen の「笑い」の類語とメタファー　The Last Laugh は誰の笑いか

渡辺秀樹

§ 初めに

以下の分析と論考は中世英文学研究者・英語メタファー研究者が行うもので、現代英詩や 20 世紀英文学研究者の専門的知見や現代詩批評の基礎知識に欠けたものである。しかし筆者は中世英詩、叙事詩・物語詩・抒情詩を 30 年間読んできた経験があり、Blake や Byron, Hopkins, Poe, Yeats らの詩を愛読する者である。また、筆者の文体論的論考は語彙意味論・歴史言語学を基礎としているため、類語・反義語・語源的意味・メタファー拡張といった点に注目する手法をとる。

§ Owen に頻出する語句と顕著なイメージ

私が特に予備知識もなく Penguin 版の Owen 詩集に収められた 36 編を読み通して、強く印象に残った幾つかの頻出イメージがある。それはまず、1) 兵士の流す血の色を太陽の赤色に喩え、ついに同化していく様、2) 戦死した、または戦死するであろう兵士をキリストに擬す、3) 戦死体を美化し、男女間の愛を超えた愛と美で飾る様、4) 兵士は恋人や妻にではなく、死んで戦場の土塊、石塊、銃口にキスをすること、5) 戦死者は微笑を浮かべていること。最後の戦死者のキスの相手であるが、次の 3 カ所があった。

(1) With him they buried the <u>muzzle</u> his teeth had **kissed**,
And truthfully wrote the Mother "Tim died smiling."
（S. I. W. (Self Inflicted Wound), V. 1-2）

(2) Red lips are not so red
As <u>the stained stones</u> **kissed** by the English dead.
(Greater Love, 1-2）

(3) My Love!' one moaned. Love-languid seemed his mood,
Till slowly lowered, his whole faced **kissed** <u>the mud</u>.
（The Last Laugh, 3rd Stanza, 1-2）

初めの引用の muzzle「銃口」には、Owen に同性愛の傾向を見て、その口唇愛を読み取る批評家がいると聞いた。[1] が、私はそれは採らない。むしろ原義の「(犬や豚の) 鼻づら」が効いているとして、ペットを愛おしむように銃口を愛撫する姿が浮かんだからだ。そして下の 2 つでは Owen は、兵士や同僚の士官が倒れて、うつ伏せで死んでいる様を書き残している。

§ 戦死者の微笑—Has your soul sipped?

戦死者の浮かべる微笑も繰り返し現れるが、これは必ず smile で、他の類語は使われない。まず指摘したいのは既に(1) として出した S. I. W. の最後の語で、この詩は次の大森論文で扱われる。類語の laughter との対比がはっきり表れている「戦死者の微笑みほど甘いものはない」という次の詩は全部引用する必要がある。引用文の右に試訳を付けた。

(4) Has your soul sipped?	あなたの魂は飲んだことがあるだろうか
Has your soul sipped	あなたの魂は飲んだことがあるだろうか
Of the sweetness of all sweets?	どのような甘いものより甘いものを
Has it well supped	あなたの魂が十分飲んだとしても
But yet hungers and sweats?	まだ飢えと汗を感じるものを

[1] 霜鳥慶邦氏の教示による。

I have been witness	私は目撃した
Of a strange sweetness,	不思議な甘いものを
All fancy surpassing	どんなに想像してもわからないだろう
Past all supposing.	考えてもわからないものだから
Passing the rays	朝の曙光の
Of the rubies of morning,	あの赤さを超えて
Or the soft rise	また穏やかに昇り来る
Of the moon; or the meaning	月光の輝きも
Known to the rose	薔薇の花にまつわる
Of her mystery and mourning.	神秘も苦悩も超えて
Sweeter than nocturnes	小夜鳴き鳥が奏でる
Of the wild nightingale	夜想曲よりも甘く
Or than love's nectar	人生の苦悩の後でもたらされる
After **life's gall**.	愛の神酒よりも甘く
Sweeter than odours	命溢れる木々の葉の
Of **living** leaves,	その香りよりも甘く
Sweeter than ardours	恋人たちの死にゆく愛の
Of **dying** loves.	灼熱よりも甘く
Sweeter than **death**	死よりも甘く
And dreams hereafter	死者が見る夢の数々よりも
To one in **dearth**	人生や、それがもたらす
Or **life** and its **laughter**.	笑い声よりも甘いもの
Or the proud wound	勝者が誇る
The victor wears	戦傷よりも
Or the last end	全ての戦争が
Of all wars.	終わったときの甘さよりも
Or the sweet murder	殉教者が
After long guard	長い囚われの身を経て
Unto the martyr	神に微笑みながら
Smiling at God;	殺人者の手で殺される瞬間よりも
To me was that **smile**,	私が目撃したのは、あの微笑みだ
Faint as a wan, worn myth,	暗く擦り切れた神話のような
Faint and exceeding small,	殺された少年がその唇に浮かべた
On a boy's murdered mouth.	微かでとても小さい
Though from his throat	彼の喉元からは
The **life-tide** leaps	命の血潮が吹き出ているのに
There was no threat	彼の唇には
On his lips.	脅しの気配はなかった
But with the **bitter blood**	しかしその苦い血潮とともに
And the **death-smell**	そして死の臭いとともに
All his **life's sweetness** bled	彼の命の甘さが、血の色に吹
Into a **smile**.	吹き込まれていた

この詩の構成を見ると、タイトルと第 1 連の「魂が啜り飲む」という摂食行為を感性へ転じたメタファー表現に**味覚**が導入されて、続く各連では**五感**で感じる「甘きもの」が列挙されていき、それらがことごとく「もっと甘いものがある」と否定され、最終連で提示された戦死した少年（兵？）の唇に血潮で染まった「微笑み」こそ最も甘いものであると結論付けられている。第 3 連では曙光と月光、薔薇の花の神秘という主に**視覚**による甘美なもの、第 4 連では小夜鳴き鳥の囀りという**聴覚**の心地よさ、そして「愛の神酒」という「啜り飲む」べき甘い感覚という摂食メタファーが再登場する。第 5 連では「木の葉の香り」という**嗅覚**表現、そして後半に導入された「死にゆく愛の甘さ」は第 6 連で「死の甘さ」という神秘的な表現に展開される。筆者の考えでは、この「死の甘さ」は詩のほぼ中間に現れて、五感の甘さの列挙を終わらせて、以後、「死者の微笑み」に主題を転換する重要表現であるのだ。第 7 連では戦争の勝者と死者の対比、第 8 連では「殉教者の法悦の微笑」を持ち出して、それをまだまだ甘くないと否定し、第 9 連から最終 11 連で「死んだ少年兵士の微笑の甘さ」が、これが焦点であるから当然長く詳しい描写で、血の色と共に最も甘きものとして読者に印象付けられるのだ。

この詩で smile/smiling が初めに現れるのは第 8 連最終行の「殉教者の微笑み」、それを受けて第 9 連第 1 行で導入された「死んだ兵士の微笑み」、そして第 11 連最終行、つまり詩の最後の言葉である。最終 3 連が「死んだ兵士の微笑み」として独立していることは、その始めと終わりに smile が現れて envelope pattern もしくは ring structure を成していることでも確実だ。主題となる語、または概念は、文章の初めと終わりに繰り返されるのであるから、主題は smile ということだ。とすると、同じように数回繰り返されている life/living と death/dying という対義語が気になるところだ。名詞 life は第 4 連に "life's gall" という連語で初めて出ると、詩の転換点となる第 5 連に "**living** leaves" と "**dying** loves" という対照形で現れて、「木の葉の匂いも、死にゆく愛の炎も甘い」ものではあるが、と引き合いに出された後、第 6 連で Owen は「死も甘いものであるし、人生の笑い声も甘い」と死のイメージと笑い声を近接させて用いている。そして第 10 連で "life-tide" と少年兵の流した血潮に用いた後、最終 11 連で重要名詞全てが、"death-smell," "life's sweetness," "smile" という形で再出・集合するのである。

対義語に注目すれば、初めから繰り返される sweet(ness) が中心語で、その対義語が第 11 連に "bitter blood" として "life's sweetness"（それぞれ波線下線部）と対比されており、目撃者がまず感じた流血の酷さが、後に微笑みの甘さに変化・昇華されていること、"life's sweetness" は第 4 連の "life's gall"（波線下線部）と同形式の名詞句で反対表現であり、gall は bitter の類語で、言い換え反復であることもわかる。であるならば、3 度繰り返された smile とそれに先行して現れた laughter は言い換えであるはずはない。前半での五感表現の流れの中で考えても、smile は**視覚的**なもの、laughter は主として**聴覚**のものであるからだ。そして本詩では smile は死者の、laughter は生者のものだからだ。

§ 3 度の繰り返し—Smile, Smile, Smile

前節では3度繰り返されたsmileが詩の主題となっていることを見た。そのsmileが3度繰り返されてタイトルとなり、詩中でも3度繰り返されるのはSmile, Smile, Smileである。タイトルの方は第1次世界大戦当時に流行った歌のタイトルをそのまま用いている。[2] では、詩中で繰り返される3度のsmileは同じ微笑みなのであろうか。

---

[2] この歌は 1915 年に "Pack up your troubles in your old kit-bag" というタイトルでロンドンで発表された。作者は George Henry Powell というウェールズ人の作詞家で、1916 年 12 月に封切られたアメリカの劇 *Her Soldier Boy* の劇中歌として使われた。英国では National Theatre をはじめとするロンドンの劇場やミュジックホールでも歌われて広まり、「英国軍の士気を高めるため」行進歌として戦場の英国兵に歌われた。その歌詞は一般に次の様である（拙訳を添える）。"Pack up your troubles in your old kit-bag,/ And smile, smile, smile,/ While you've a lucifer to light your fag,/ Smile, boys, that's the style./ What's the use of worrying?/ It never was worth while, so/ Pack up your troubles in your old kit-bag,/ And smile, smile, smile."（揉め事なんか雑嚢に詰め込み/ ほほ笑もう、ほほ笑もう、ほほ笑もう/ 煙草に火をつけるマッチがあるなら、/ バリッとやろうぜ、それが立派な男ってことさ/ 悩んで一体何になる/ 悩む価値なんて何もないさ/ 揉め事なんか雑嚢に詰め込んで、/ ほほ笑もう、ほほ笑もう、ほほ笑もう）（語注：fag は「巻き煙草」と「雑用掛・辛い仕事」、luchifer とは当時のマッチの商標名（燐光を放つことから））興味深いことに次の大森論文では、S. I. W. に描かれた戦場の塹壕がダンテの地獄に比されているが、地獄篇で奈落にいるのは

(5) Smile, Smile, Smile

Head to limp head, the sunk-eyed wounded scanned
Yesterday's *Mail*; the casualties (typed small)
And (large) Vast Booty from our Latest Haul.
Also, they read of Cheap Homes, not yet planned;
"For," said the paper, "when this war is done
The men's first instinct will be making homes.
Meanwhile their foremost need is aerodromes,
It being certain war has just begun.
Peace would do wrong to our undying dead,—
The sons we offered might regret they died
If we got nothing lasting in their stead.
We must be solidly indemnified.
Though all be worthy Victory which all bought.
We rulers sitting in this ancient spot
Would wrong our very selves if we forgot
The greatest glory will be theirs who fought,
Who kept this nation in integrity."
Nation?—The half-limbed readers did not chafe
But **smiled** at one another curiously
Like secret men who know their secret safe.
(This is the thing they know and never speak,
That England one by one had fled to France
Not many elsewhere now save under France).
Pictures of these broad **smiles** appear each week,
And people in whose voice real feeling rings
Say: How they **smile**! They're happy now, poor things.

この詩の内容はざっとこうだ。戦場で兵士たちが、新聞に書かれた偉い政治家の発言を読む。「この戦争が終わったら兵士たちも帰宅するだろうが、当面彼らに必要なのは飛行場を作ることだ。戦争は始まったばかりだから、(勝つ前に) 今終わってしまったら、既に戦死した我々の息子たちが墓の中で (自分の戦死は無駄になったと) 悔やむかもしれぬ」と、(今戦場にいる兵士がただただ早く故国へ帰りたがっているということを全く考えない) 決して戦地に赴くことのない政治家が書いている。ここの表現 "Peace would do wrong to our undying dead,/ The sons we offered might regret they died" では、戦死した兵士たちのことを述べながら、現在戦場にいる兵士たちがいずれ戦死することが前提とされている点で、戦場の兵士にはショックのはずだ。だが、これを読んで兵士たちは皮肉の微笑を浮かべるのである (第1のsmile)。そして戦場カメラマンが彼らを撮影しようとするときに、彼らは、故郷の肉親や恋人へ向けて微笑を浮かべる (第2のsmile)。その写真が載った新聞を見た故国の人々は言う。「ああ、兵隊さん、可哀そう。微笑っているよ、今は幸せなんだね」との大きな誤解である。

この詩は出だしのタイトルと最後の行にsmileが繰り返され、内容的に第3部というべき19行目から最終26行の塊でも、出だしにsmile、最終行にsmileと、envelop patternを取るepanalepsisというレトリックに基づいて書かれている (下線部) 。しかし、19行、24行、26行の smile の様相は異なるのだ。初めは皮肉・諦め・絶望の smile であり、第2は親愛の情の表明の smile であり、最後は他人が見て取った「幸せそうに見える表情」の smile なのだ。そうすると、詩を読んだ後ではタイトルの意味はガラッと変わる。読者の誰もが、兵士を鼓舞する当時の流行り歌のタイトル "Smile, Smile, Smile" から引喩で採られたと思ってこの詩を読み始めるが、後半の異なる3度の

堕天使 Lucifer であることを知れば、「地獄のような塹壕の中で、煙草に火をつける兵士に Lucifer が寄り添う」という構図が浮かぶ。さらに I. Prologue の 23 行 "Death sooner than dishonor, that's the style" で "Pack up your troubles in your old kit-bag" の第 4 行への引喩がなされているという共通性がある。なお、"to light your fag" とは「煙草にマッチで火をつける」と「辛い仕事を和らげる」の掛詞かも知れぬ。

smile の様相に揺り動かされ、しばし考え込むうちに、タイトルの元の意味「英国兵は元気だぞ、何があっても微笑もう、微笑もう、微笑んでやり過ごそう」から、実際の戦場の兵士たちは「(故郷の人々の無理解を）嘆き、諦め、赦し、自らを鼓舞し微笑むのだ」と変わるのではないか。さて、ここに現れた3種の smile の様相は次で論じる The Last Laughの smile とどのように関わるか。

§ The Last Laugh

まず全文を見る。本詩は本人に少なくとも 2 度改訂されているので、出版されたものには数種のヴァージョンがあるがここに引用するのは最終版で Penguin 版の選集収録のもので、下線部は Owen に特徴的な不完全韻である。

(6) The Last **Laugh**

'Oh! Jesus Christ! I'm hit,' he said; and <u>died</u>.
Whether he vainly cursed or prayed <u>indeed</u>,
The Bullets **chirped**-In vain, vain, vain!
Machine-guns **chuckled**,-Tut-tut! Tut-tut!
And the Big Gun **guffawed**.

Another sighed,-'O Mother, -Mother, - <u>Dad</u>!'
Then **smiled** at nothing, childlike, being <u>dead</u>.
And the lofty Shrapnel-cloud
Leisurely gestured,-Fool!
And the splinters spat, and **tittered**.

My Love!' one moaned. Love-languid seemed his <u>mood</u>,
Till slowly lowered, his whole faced kissed the <u>mud</u>.
And the Bayonets' long teeth **<u>grinned</u>**;
Rabbles of Shells **hooted** and <u>groaned</u>;
And the Gas **hissed**.

初めに述べたように、筆者は Wilfred Owen の 36 編の詩を通読して深い感動を覚えたため、テーマを絞ってその詩を論考したいと考えたのだが、頻出する幾つかのイメージのなかで特に、死んだ兵士の浮かべる smile を分析したいと考えたきっかけは、英国戦争詩人の研究者である佐藤芳子氏の『ウィルフレッド・オウエン戦争詩篇』ウィルフレッド・オウエン研究第 1 巻　（東京：近代文藝社 1993）での訳文を見たからである。詩の訳文はとてもうまく、分からなかった箇所に納得がいく解釈がされて訳出されていたが、一つ、タイトルが「死にゆく兵士の笑み」なっていることに疑問を感じた。前節までで述べたように、Owen は laugh と smile を峻別しているからである。佐藤氏は原詩のタイトル The Last Laugh の訳ではなく、詩中に現れる第 2 連の “Then smiled at nothing, childlike, being dead.” の部分をタイトルに込めて訳したのかも知れないが。議論に必要なので全文を引用する。

佐藤芳子訳　死にゆく兵士の笑み
「ああ、畜生め（神様）！　やられた」と兵士は叫び、死んでいった。
兵士が　むなしく神を呪いながら死んでいったのか、
真実　神に祈りながら死んでいったのか　わかりはしないが、
（死んだ兵士の頭上を）＊　弾丸は（おまえなんぞ死んだって）＊
無駄だダダー　無駄だダダー　無駄だダダー！　と飛びかい、
機関銃は　楽しげに　タタッ　タタッ　タタッ　タタタタタ…．．！と笑い
大砲は　（大立者の政治家とつるんだ死の商人よろしく）＊　ドドーン！　と馬鹿笑いした。

また　べつの兵士は　死際に　あえぎながら
つぶやいた　―　「ああ、かあさん、かあさん、父さん！」

そして　無心な子供のように　笑みを浮かべた　―　虚ろな笑みを、もう死んでいるがゆえに。
そして（死んだ兵士をあざ笑うように）＊りゅうさん弾は
馬鹿め！（ババーン）　と空高くゆるやかにみえを切り、
振りかかる小片が　くすりと忍び笑いをした。

また　ある兵士は　「ああ　おまえ（ペギー）！」とうめいて死んでいった。
そのさまは　もの憂げな恋やつれのようにも見えたが、やがて　兵士の体は
ゆっくりと前にのめり、その顔は　大地に叩きつけられた。
（そして死んだ兵士の頭上を）
銃剣の長いつばが歯をむき出してニタリと笑い、
弾丸は野次馬よろしくヒューヒューとさわぎ飛び、
毒ガスはシューと耳ざわりな音をたてて飛んで行った

一読して分かるように異なる原文を訳したものだが、タイトルは同じである。本文第 2 連第 2 行に smiled という動詞が出てくるが、これがタイトルで "The Last Laugh" と言い換えられていると解釈したとしたら、それは誤解である、というのが私の結論である。以下ではその論証を行う。

まず「笑い」を意味する名詞・動詞の類語群が存在する中で、笑い声が第一義であるのが laugh であり、表情としての微笑が第一義であるのが smile である。これらが上位語となり、笑い声の種類を細かく描写する giggle, chuckle, snigger や、微妙な表情の違いを表す grin が下位語として群を作るからだ。これが一般的見解であることは、英語類語辞典での「笑い」の類語群の記載を見れば瞭然とする。下に引用したのは *Roget's Thesaurus* の *laugh* の類語である。

Roget's Thesaurus の laugh の類語　838　（太字は The Last Laugh 中に使用された語）
V. rejoice;　dance, skip, caleer, sing, carol, chirrup, **chirp**, hurrah
smile, simper, smirk, **grin**
giggle, **titter**, snigger, crow, smicker, **chuckle**, snicker, cackle
shout, split, roar

ここに示された類語群（下位語群と言っても良い）を見て驚いた。Owen は The Last Laugh 中で、戦場で響く射撃・爆発音を様々な動詞・名詞をメタファー的に用いて不気味に描写しているのだが、第 1 連の chirped, chuckled、第 2 連の tittered、第 3 連の grinned が、Roget's Thesaurus で「笑い」の類語として記載があるからだ。これは当然のことでもあるが、拙論の傍証ともなる重要な記載なのである。つまり、Owen が用いた「笑い」の（メタファー用法での）類語は、grinned を除き全て、音としての笑いであるからだ。最後の毒ガスの hiss も、地面を這いながら迫って来る爬虫類を思わせる不気味な音の描写であるが、この動詞は人が主語の時には嘲笑を意味する用法がある。[3]　表情の「微笑」を表す smile の一度だけの使用は、これらと対比的に、音の「笑い」でないことは明らかだ。砲弾の炸裂音、機関銃の射撃音、ライフルの弾丸の飛来音、こうした轟音の中、死にゆく兵士が「幼児のような微笑みを浮かべている」という音のなさが、ドラマチックな対比を成し、本詩を読む者を揺さぶるのである。付け加えて、「獣が牙をむく」あるいは「人が皮肉の笑みを浮かべる」という意の grinned が銃剣の刃の煌めきをまるで猛獣が牙をむいた様に見立てたように用いられて、穏やかな smile と対照を成していることも注目すべきである。この grinned は次行の groaned と不完全韻をなしているが、このような母音の長さや音質を変えたペアを Owen はしばしば使う。この形式の日本語名称は定まっていないようだが、英語でも筆者が調べた限りでは pararhyme, half-rhyme, near-rhyme, offrhyme, slant-rhyme と 5 種あった。[4]　が、名称はどうでも

[3]　*OED* hiss v. 2. Of a person: To make this sound as an expression of disapproval or derision. の定義および *Oxford Advanced Learner's Dictionary* の見出し語 derision の定義 "unkind laughter or remarks that show you think sb/sth is ridiculous and not worth considering seriously" が参考になる。大森文子准教授の示唆。研究会においてTrane DeVore 准教授より受けた「最終行の毒ガスの音を表すhissedからは蛇が連想されて、塹壕が地獄でありLuciferがいるというメタファーと通じるのではないか」という指摘も興味深い。

[4]　それぞれが *OED* の見出し語になっており、中でも pararhyme では Blunden の Owen 詩集への序文からの引用が

よい。重要なのはこの不完全韻が、実にしばしば、驚くべき意味の結合を生み出していることである。[5]　第 2 連のペア、Dad と dead は「父さん」と呼び掛けて「死んだ」と呼びかけられた Dad が強く心に残るし、第 3 連の grinned と groaned は、銃剣の刃先の無音の煌めきと弾丸の炸裂音を対比しながら、口を開けての歯・牙の煌めき、口から洩れる苦悶の音と口元への意識の集中をもたらすからだ。これらによって、死んだ兵士の子供のように微笑む口元が一層際立つのである。

筆者の解釈のもう一つの根拠は、諺 “He laughs loudest who laughs last.” 「最後に笑う者が一番大声で笑う＝勝負は終わりまでわからない」である。この諺には前半が longest,や best となるヴァイリアントもあるが、<l>の頭韻句を構成する loudest または longest と頭韻句になっているのが正式であろう。[6]　そうするとこの最上級の loudest こそ、この詩の主旨とタイトルの意味を解く鍵となるのだ。「最期に笑う者は最も激しく大きな声で笑う」、本文では銃の発射音や砲撃の炸裂音を、「笑う」の意味をメタファー的に表す動詞を連ねて表し、それらの轟音の中、声を上げずに微笑む兵士の無音の死があたかも戦場を一瞬無音にしたかの如く、そしてまた轟音に飲み込まれる様が、あるいは轟音が止み戦闘が終わった戦場、爆裂音がなくなった戦場に横たわる無言の死屍累々、で、生き残った兵士達の頭の中に大きく響くのが「死の高笑い」だ、という意味ではないか。つまりタイトル The Last Laugh は戦場で死が様々な笑い声で砲撃し銃撃し、兵士を殺していく、そして「最期の笑い」を死が高らかに笑う戦場、「死の勝利」という意味だと筆者は考えるに至った。

§ 変更されたタイトルと語句

Owen は戦場で書いた詩を何度も書き直したことでも知られている。Sassoon に書き直してもらった草稿も残っている。本詩も少なくとも 3 度書き直されたようで、最初は “The Last Words” という複数形のタイトルであった。第 2 稿の直し、「見せ消ち」になっている第 3 稿写では、はっきりわかる元のタイトルは The Last Word で、これが The Last Laugh” に直されている。この訂正を辿れば、The last Words という複数形は死ぬ兵士の 3 種類の最後の呼びかけの言葉と、それに対する銃や砲弾の In vain, vain, vain という笑い声の対比、そして The Last Word という単数形になると、「死ぬ直前の兵士の言葉」という総合的表現としか取れなくなり、3 連に分かれている各連初めの兵士の言葉、誰に呼びかけて死ぬか、これが主題であったはずだ。第 1 連：イエスキリスト　第２連：母父　第３連：恋人の女性、とヴァリエーションがある理由となる。そうすると、マンチェスター第 2 連隊の小隊指揮官・副官として日々兵隊の死に直面した経験を述べているともとれる。死ぬ前に兵士は必ず誰かに呼びかけてこと切れる、その祈り、呼びかけの言葉が弾丸の炸裂の中で聞こえるのだ、と。

しかし Owen はタイトルをまた The Last Laugh と変え、本文中の語句も何語か変えた。そうすると詩の内容も変わった。兵士は撃たれて倒れる時に「神様、お母さん、愛しいお前」と最後に叫ぶ。が、その叫びは神様には届かないし、祖国にいる父母や妻や恋人にも届かない。兵士らの耳に入るのは鉄砲の嘲笑と大砲の砲弾の炸裂の大笑い。しかし死んだ兵士の顔には、幼子の微笑みが浮かんでいる。耳をつんざく様々な笑い声の戦場で、最後に高らかに笑うのは死で、敵味方、勝った方の兵士ではない。死は戦闘中には発射音・炸裂音の高笑いを続け、戦争という愚行蛮行を笑いながら兵士を殺して行く。死が勝利の笑いを笑う。対照的に戦場には穏やかな表情をした兵士の死体が累々と横たわる、これは “the sound of silence” 「沈黙の発する音・声」とも言うべきものだ。実際には聞こえない戦闘後の死の高笑い、またはその象徴たる戦闘中の銃撃音爆音の対照・対比、これがテーマ、「最後の笑い」であると考える。

初例であり、half-rhyme と slant-rhyme でも Owen への言及から用例が採られている。

[5] 例えば、*Arms and the Boy* の第 2 連の 2 つのペア、bullet-lead と lad, teeth と death や *Has Your Soul Sipped?* の第 3 連の morning, meaning, mourning、第 6 連の death と dearth など、本質的な意味の繋がりを示唆するものが多い。

[6] Lafcadio Hearn（小泉八雲）の Kwaindan（怪談）中に収められた Rokuro-Kubi 「ろくろ首」には “Kwairyo laughed long and loudly at these questions.” と両方使った頭韻文が見えること参照。

§ The Last Laugh の smile

では、この詩の戦死した兵士の浮かべる微笑は、どのような気落ちの表明なのであろうか。兵士は無言で死んでいるのであるから、それを見た者が "Then **smiled** at nothing, childlike, being dead" 「その微笑みは子供の様だ」と見て取ったのである。子供のような微笑みとは、ではどのような内面の表出なのであろうか。ここで (1) として引用した "Tim died smiling." が参考になろう。戦友たちは自殺して戦場の苦悩から逃れた Tim の最後の表情を「母親へ対する微笑み」として伝えている、「苦しまないで死にましたよ」と。これと似ているのは (5) Smile, Smile, Smile の引用中、新聞に政治家が書いた "our undying dead" 「いずれ戦死すべき我らが息子たち」と呼ばれた兵士の写真撮影の時の微笑みである。Smile, Smile, Smile では 3 度 smile が繰り返されたが、第 1 は戦場に赴かない故国の人の無理解に対する怒りと諦念の微笑、第 2 が故国の家族や恋人へ向けての親愛の微笑（頑張っていますよ、まだ生きていますよ）、そして第 3 がその写真の兵士の微笑を見て、「ああ可哀そう、戦場に行っても幸せなんだね」と発言する故国の人々の誤解であった。つまり、無理解・傲慢に対する怒り・諦念から頑張って戦っているとの矜持、親しいものへの親愛、そして兵士の微笑を見た人々の憐憫と誤解である。

The Last Laugh では 3 連のいずれでも兵士は撃たれて、誰かに向かって呼びかけて息絶えるのである。筆者は考える。その呼びかけた相手への親愛の情が死に顔に残ったのだろうと。そしてさらには、死んだ兵士の微笑を見た者たちが、多分「ああ可哀そう、戦死しても幸せなんだね」と誤解するだろうと。で結論であるが、The Last Smile というタイトルであるならば、「死にゆく兵士の微笑み」となろうが、The Last Laugh は「最後の高笑い、または死の勝利」という意味である。

参考文献

Blunden, Edmund, 1958. *War Poets 1914-1918*. London: Longmans, Green & Co. Ltd.

Griffith, George V., 2015. "Owen's Dulce et Decorum Est," *The Explicator* 41, 3: 37-39.

Lewis, C. D., ed., 1969. *The Collected Poems of Wilfred Owen edited with an introduction by C D. Lewis and a Memoir by Edmund Blunden*. London: Chatto & Windus.

O'Keeffe, Timothy, 1972. "Ironic Allusion in the Poetry of Wilfred Owen," *Aeriel* 3, 4: 72-81

Watanabe, Hideki, 2016. "Sir Israel Gollancz's Translation of *Beowulf* (lines 1159b-1622): Edited from his Handwritten Leaves Found Inserted in Wyatt's Edition (1894)." Paper read at the 8th Triennial Conference of International Association of University Professors of English 2016 at University of London.

Wilfred Owen: Anthem for Doomed Youth. 2015. Penguin Classics.

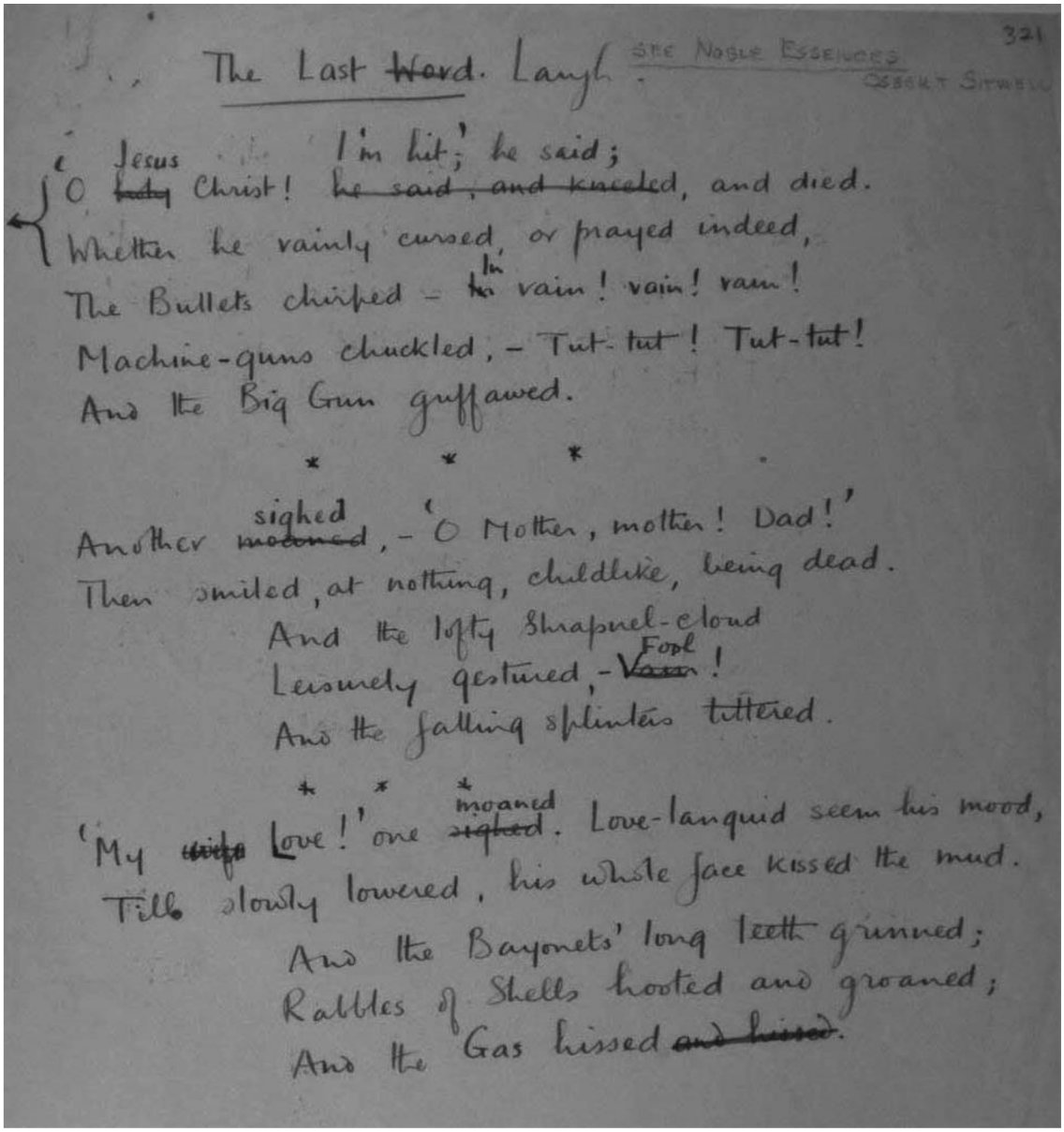
佐藤芳子. 1993. 『ウィルフレッド・オウエン戦争詩篇』ウィルフレッド・オウエン研究　第 1 巻　東京：近代文藝社.

佐藤芳子. 1998. 『ウィルフレッド・オウエン』ウィルフレッド・オウエン研究　第 2 巻　東京：近代文藝社.

霜鳥慶邦. 2013.「<第一次世界大戦世代> 不在の時代に: Carol Ann Duffy, 'Last Post' と傷の記憶/記憶の傷」『英文学研究』90: 1-17.

中元初美. 2013.『現代英詩を読む—エリオット、オウエン、ラーキンの作品を中心に』広島：渓水社.

The Last Laugh 第 2 手稿への書き直しの様子
The First World War Poetry Digital Archive の画像を借用
(https://www.oucs.ox.ac.uk/ww1lit/collections/item/4974)



321

The Last ~~Word~~. Laugh

SEE NOBLE ESSENCES
OSSICK & STRAUSS

'O Jesus ~~Lady~~ Christ! ~~he said, and knelt~~ed, and died.
Whether he vainly cursed, or prayed indeed,
The Bullets chirped – In ~~In~~ vain! vain! vain!
Machine-guns chuckled, – Tut-tut! Tut-tut!
And the Big Gun guffawed.

* * *

Another sighed ~~moaned~~, – 'O Mother, mother! Dad!'
Then smiled, at nothing, childlike, being dead.
And the lofty Shrapnel-cloud
Leisurely gestured, – Fool ~~Vain~~!
And the falling splinters tittered.

* * *

'My ~~wife~~ Love!' one moaned ~~sighed~~. Love-languid seem his mood,
Till slowly lowered, his whole face kissed the mud.
And the Bayonets' long teeth grinned;
Rabbles of Shells hooted and groaned;
And the Gas hissed ~~and hissed~~.